

わかから



修学旅行 3年写真



晴瞬祭 全校写真

PTA機関誌 わかろう 目次

「所感」PTA活動を通して」	PTA会長	菊本 光則	……	1
「啐啄同時（そったくどうじ）」	校長	木下 浩子	……	2
「子どもたちの成長」	一年学年委員長	古屋敷 美沙岐	……	3
「地域の今後の役割について」	二年学年委員長	糀谷 正典	……	4
「学校行事を見て感じたこと」	三年学年委員長	東 哲也	……	4
「一年経って感じたこと」	社会科	二谷 亮輔	……	5
「あたたかな言葉が生まれる場所で」	国語科	中上 理佐子	……	5
「若浦中学校での出会い」	数学科	和泉 駿	……	6
「夢を語り合う場所」	保健体育科	橋本有見果	……	6
「自ら学ぶ生徒たちとともに」	英語科	山田 有加	……	7
写真集	一年生	……	……	8
	二年生	……	……	9

写真集 三年生

部活動、行事の感想・主張など	……	10.
「バスケット部での成長」	一年 古屋敷 然	……
「部活動を通しての学び」	二年 杉浦 千穂	……
「晴瞬祭を通して」	三年 長岡 咲希	……
「陸上を通して学んだこと」	三年 菊本 瑛太	……
「普通って？」（少年の主張作文）	三年 宵田 紗良	……
		14.
		13.
		12.
		12.
		11.



所感〜PTA活動を通して〜

PTA会長 菊本 光則

早春の候、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平素はPTA活動に多大なご協力を賜り御礼申し上げます。

さて、「主体性」と「圧倒的当事者意識」を掲げ新学期に臨んだ若浦中学校の生徒たちを陰ながら応援させていただきました。晴瞬祭・英雄祭では生徒自らが企画・運営し、成功を収めたその積極性に感心しきりでした。探究活動の各学年のテーマの獨創性、大人顔負けの発表に驚かされました。大阪・関西万博や平和祈念式典など得難い貴重な体験と共に、生徒たちの思い出として心に刻まれたことと思います。

学内の部活動は地域移行の動きとともに、その在り方に徐々に変化が訪れて参りました。そのような中、教職員の皆さまには日々のご指導に留まらず、生徒が活躍するその姿を会場まで足を運び声援を送り、時には若浦だよりや横断幕を掲げ、生徒諸子の頑張りを讃えてくださった事、保護者の立場からも御礼申し上げます。

PTA活動については、引き続き誰もが参加しやすい

と感じる姿を目指し、保護者が相互に協力できる方法を模索していただければ幸いです。

PTA会員の皆様、木下校長先生以下諸先生方の多大なるご協力・ご指導を賜り一年の活動を終えることができました。心より御礼申し上げます。今後も若浦中学校がいつまでも「夢を語り合う学校」であり続けることを祈念しております。

啐啄同時（そったくどうじ）

校長 木下 浩子

日頃より本校の教育活動に深いご理解と温かいご支援をいただき、誠にありがとうございます。保護者の皆様、そして地域の皆様に支えられながら、子どもたちが毎日元気に学校生活を送っていることを、大変うれしく思っております。

さて、禅の言葉に「啐啄同時」という言葉があります。卵の中の雛鳥が殻を破って今まさに生まれ出ようとするとき、内側から雛が殻をコツコツとつつくことを「啐」といい、そのとき親鳥が外から殻をつつくことを「啄」といいます。雛鳥の「啐」と親鳥の「啄」が重なり合うことで、殻が破れ、雛鳥は外の世界へと生まれ出てきます。このように、**機を得て両者が相応じる得難い好機**を「啐啄同時」というのだそうです。

殻の内と外で相談しながら同時につつくことなどできない中で、親鳥の「啄」が早すぎても遅すぎてもいけないというのは、本当に難しいことです。

この言葉を聞いたとき、人間の親子関係はもちろん、

教師と生徒との関係にも当てはまると感じました。教育の現場では、教師の指導と生徒自身の内的な自覚に基づく自発とが重なり合い、殻を破るような大きな成長を見せる、うれしい瞬間に数多く出会います。その一方で、思うような成長が見られないときには、大人のペースで殻をつついていないか、あるいは殻の内側からの小さな「コツコツ」という音を聞き逃してはいないか、立ち止まって考える必要があるのかもしれない。

どれほど耳を澄ましても長い間音のしない卵を前にすると、親鳥は雛鳥のタイミングを待ちきれず、つい外からせかすようにつついてしまいます。殻の中で雛鳥は、その音をどのように聞いているのでしょうか。「うるさいなあ」と感じながらも、外からの「コツコツ」に愛情を感じ取ってくれているとよいのですが。

殻の中の様子は、太陽に透かして見ても、うつすらとしか分かりません。見えにくいからこそもどかしく、だからこそ、見えにくい相手と通じ合えたときの喜びは大きなものです。雛鳥が与えてくれる悩みと喜びは、思春期の子育てや中学校教育の醍醐味なのかもしれません。

これからも保護者の皆様と、情報だけでなく思いも共有しながら、地域とともに子どもたちの成長を支える学

校づくりに努めてまいります。今後とも、変わらぬご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

子どもたちの成長

一年学年委員長 古屋敷 美沙岐

今年度、初めて子どもが中学生になり新たな生活の始まりとなりました。

中学生時代は、親離れ子離れの時期でもあります。親が学校生活に関して干渉することも減りました。家庭では多少は口うるさく言うことがあっても、結局のところ自分で考えて行動しています。子どもは本来持っている姿と葛藤しながらも調整して、自分の生き方を決める力があります。何気なく目についた若浦の教育方針『主体性を育み、自分のことを知り、自分の強みをのばす』がまさにこの時期に必要なことなのでは・・・と改めて考えさせられる日々です。子どもたち自身は、今は気づかないことでも、自分で考えて決め、やったことは例えどんな結果になったとしても自分の力になります。それを先回りして手を出すのではなく、言いたいことを我慢して、見守り、見届けていくのが親の役割なのかなと感じました。子どもたちを真ん中に、今後も保護者が一番の応援者で有り続けたいと思います。

地域の今後の役割について

二年学年委員長 糺谷 正典

“PTA活動にかかる負担の削減”という世間的な潮流とは逆行する考えではありませんが、学校行事諸々をPTA Aという組織のみでなく、地域で包括的に支援する仕組み”というのも一つの方法かと思えます。PTA活動や学校行事を通じて、学校は広く地域のハブとしても機能していると感じ、このように思いました。

また地域的な人口の減少、またAIをはじめとした技術の発達に伴い、子どもたちが地域の方と交流する機会もまた減少傾向にあるかと感じます。情報化の一途をたどる現在、あえて企図しない出会いや発見などもあつて良いのではないでしょうか。子どもとの会話で度々耳にしますが、生徒による校則の改正や授業研究会への参加など、“生徒の自主性を重んじた教育”を実践されていると聞きます。校長先生をはじめとした先生方諸兄の様々な取り組み、また子どもたちの意見も取り入れながら、今後のPTAの役割を見定めていければと考えます。

学校行事を見て感じたこと

三年学年委員長 東 哲也

学年委員を務めさせていただくにあたり、保護者の皆様にはご協力をいただき、ありがとうございました。

私の子どもは、二年生の時に和歌山県から転校してきました。

晴瞬祭や英雄祭を拝見し、子どもたちが主体性をもつて取り組み、一人ひとりが生き生きとしていると感じました。また、探究活動は、覚える学習ではなく、行動力を育てる良い取組であると思えます。

生徒に対して過度に干渉するのではなく、やりたいことを尊重しながら指導されている点が印象的でした。大阪・関西万博への校外学習では、学年を超えた縦割グループで活動したと子どもから聞き、先生方が試行錯誤を重ねながら指導されていることが伝わってきました。

生徒数が少ないため、場面によっては寂しく感じることもあるかもしれませんが、その分、一人ひとりに丁寧に向き合っていただけ恵まれた環境であると感じます。卒業生の皆さんの今後のご活躍を心より期待しています。

一年経って感じたこと

社会科 二谷 亮輔

若浦中学校に赴任して一年が経とうとしています。4月の着任式では、生徒会が中心となり、新しく赴任した教職員を温かく迎えてくれました。計画から運営まで全て生徒自身が考え、主体的に式をつくり上げた、後から聞きました。その姿に、若浦中学校が大切にしている「主体性」や「圧倒的当事者意識」が、生徒一人ひとりの中にしっかり根付いていることを実感しました。

また、若浦中学校では晴瞬祭や英雄祭といった行事に生徒が主体的に取り組むだけでなく、毎月行われている授業研究会にも全校生徒が参加し、教師と共に授業をより良くする挑戦を続けています。これらのことから、若浦中学校全体が「生徒と教師が共に学び、共に挑戦する場」であると感じています。

この学校や生徒の姿から学んだことを還元していく中で、生徒の「主体性」や「圧倒的当事者意識」をさらに伸ばし、学校全体で新しい学びを創り出す挑戦を続けていきたいと思っています。

あたたかな言葉が生まれる場所で

国語科 中上 理佐子

人の心には、日によってちがう色があるように感じます。嬉しいときもあれば、落ちこんでしまうときもあります。そんな気持ちのゆれによって、やさしい言葉が出てくる日もあれば、思わずきつい言葉になってしまう日もあります。心は白か黒かのどちらかではなく、その間に広がるたくさんの色をもったグラデーションのようなものなのだと感じます。

この一年、若浦中学校のみなさんと過ごす中で、私はみなさんの言葉に心が温かくなったり、元気をもらったりすることがたくさんありました。優しい心がにじむ言葉に、何度も触れさせてもらいました。

だからこそ、みなさんの口からこぼれる言葉が、これからも美しく温かいものであってほしいと思っています。そのためにも、いろいろな文章や価値観にふれ、素敵だと感じる言葉を自分の中に積み重ねていってください。

そうして出会った言葉は、きつといつか誰かを支えたり、自分をそっと励ましたりしてくれる力になるはずですよ。みなさんがそんな言葉にたくさん出会えるように、

私自身も国語をもっと深く学び、みなさんと一緒に言葉の力を育てていきたいと思えます。

夢を語り合う場所

保健体育科 橋本 有見果

若浦中学校での出会い

数学科 和泉 駿

若浦中学校に着任してから一年が経ちました。新しい環境の中で、生徒たちや教職員の方々との出会いに恵まれ、毎日が学びと気づきの連続でした。授業づくりや学級経営では、これまでの自身の経験だけではうまくいかず悩むこともありましたが、生徒たちの反応や、これまで培ってこられた若浦中学校の伝統を手がかりに、少しずつ自分なりの工夫を重ねてきました。

晴瞬祭や英雄祭などの行事や日常の関わりを通して、生徒たちが成長していく姿を間近で見ることができたことは、大きな喜びであり、教員としてのやりがいを改めて感じる機会となっています。

これからも生徒一人一人と向き合いながら、この学校での学びを生徒たちに返していきたいと考えています。

「夢を語り合える学校」―その言葉を若浦中学校で聞いてから、私は自分の夢を他者に話すことは今まで数えるほどしか経験がありませんが、自分の考えや夢を他者へ素直にハッキリと伝えられる人になりたいと思い、いつもその言葉を大切にしながら過ごしてきました。

また、自ら課題を見つけ、自ら学び、考え、そして行動する姿は、だれもが向かって行きたい理想像だと思います。そんな中で、発表やレポートをまとめることが苦手な人も仲間と支え合いながら前向きに挑戦する皆さんの姿は、これから立ち向かっていく壁にも負けない大きなパワーを持っているように見えます。その笑顔と挑戦する心を大切に、私自身も生徒の皆さんの夢に寄り添いながら努めてまいります。

自ら学ぶ生徒たちとともに

英語科 山田 有加

若浦中学校に赴任し、最初に感じたのは生徒たちの明るさと主体性でした。登校時に出会った多くの生徒が、初めて会う私にも元氣よく「おはようございます!」と挨拶してくれたことを、今でも鮮明に覚えています。その明るさに触れ、「なんて素敵なお友達たちなのだろう」と感じたことが、私の第一印象でした。

また、生徒たちが自分の意見を積極的に伝える姿勢にも大変驚かされました。英語の授業では、ペアワーク中に沈黙することなく、主体的に英語で話し続ける姿が見られました。さらに授業研究会やわくわくタイムでは、臆することなく質問したり、自分の意見を述べたりする姿がとても印象的でした。一年間を通して、自ら学ぼうとするこの姿勢こそが、若浦中学校の生徒の成長を支えているのだと実感しました。生徒たちの姿勢に、私自身何度も驚かされ、たくさん学ばせてもらいました。この一年間、生徒たちと共に学び、共に成長できたことに、心から感謝しています。

一年生





一年生



三年生



バスケット部の成長

一年 古屋敷 然

まだまだ未熟なのでこれからも仲間と一緒に精進していきたい。

若浦のバスケット部では走るメニューが多いため練習はきつく、体力的にも精神的にも辛いと感じることは多い。試合に近い練習では仲間との連携の難しさを実感し、自分のミスで守れず失点してしまったり、声掛けが足りず守りきれなかったり、簡単なシュートを外して負けたりすることもあった。このようなことで味方に迷惑かけているかなと考えることもあり嫌になることもあった。しかし、試合で協力してシュートを決めた瞬間や仲間と声を掛け合いディフェンスを成功させたときは辛さがなくなるほど楽しい。

バスケットボールは一人では成り立たないスポーツだ。パスを回し頼れる味方と助け合いながらゴールを目指し続ける中で協力することの大切さをすごく学んだ。

また、試合で負けたときや流れが悪く点が取れなかったり点を取られ続けたりしているときには、その原因を話し合い、次のために努力する姿勢も身についたと思う。バスケット部の経験は僕を精神的にも技術的にも成長させてくれた大切な時間だった。

部活動を通しての学び

二年 杉浦 千穂

「基礎を完璧にし、フットワークや体力作りなど土台を完成させる」これは今年度私が決めていた目標です。

この目標を達成するため、私は日々の放課後の練習を大切にしました。学校だけではなく家での素振り、フォームの確認、体力作り、体幹トレーニングと普段できないことを積み重ねていきました。

しかし最初は結果がでにくい上、身体面でもきつく諦めそうになったことがあります。でもテニスの勝利した時の快感が忘れられず、中丹に行くという大きな目標のために練習を重ねました。それにつられチームの雰囲気も良くなり、全員が勝つぞという気持ちで練習に打ち込むことができました。すると、二ペアも中丹に行くことができました。

私は一人の部活の取り組み方、勝ちたいという気持ちチームに伝わっていき団結できることを学びました。また私もチームのおかげで続けられたと思います。だから、次は全員で中丹進出を目標に全員で成長をしたいです。

晴瞬祭を通して

三年 長岡 咲希

私は、三年間晴瞬祭の種目委員に立候補し、みんなが楽しめる種目になるよう努めてきました。ですが、「みんなが楽しめる種目」は自分が思っている以上に難しいものだと一年生のときに実感しました。

一人一人得意なことも苦手なことも好きなことも嫌いなことも違います。そのため、みんなが楽しめる種目を作るには運動が苦手だったり好きではない人にも、できるだけ前向きな姿勢で取り組んでもらえる工夫をする必要があります。

一年生の時は実際にしてみると自分が思っていた以上に体力が必要だったことと晴瞬祭で行う二つの種目を組み合わせたようなものだったため、「あまり楽しくなかった」との声が上がってしまいました。そのため二年生の時は晴瞬祭では行わない種目を四つほど組み合わせる障害物リレーを行いました。去年よりは好評で、保護者の方たちや生徒の盛り上がり具合も良かったと思います。三年生は二年生で学んだことを活かし、一度に多くの種目ができる、借り人障害物競争を行いました。これ

なら運動が苦手な人も「頭を使う」という点で活躍できると考えたからです。

私は、この三年間を通して、「みんなが楽しめる種目」を作るには、自分の経験を取り入れ、誰かには当てはまる部分を多く用意することが必要だと学びました。

この学びを高校や社会に出たときに活かしていこうと思います。

陸上を通して学んだこと

三年 菊本 瑛太

僕はこの中学三年間で陸上を通してたくさんのことを学びました。

陸上を通して学んだことは目標に向かって諦めずに努力することの大切さです。良いタイムで走れる時もあれば、なかなかタイムが上がらない時もあり、思うように走れない時もたくさんありました。陸上はすぐに結果が出にくいスポーツです。ですが、自分の目指す目標に向かって毎日練習をすることで少しずつ記録が伸びていきました。

そして僕は全国大会に出場できるようになりました。

全国のレベルの高さを肌で感じる事ができてとても良い経験になりました。この経験からすぐに結果を求めるのではなく諦めず継続して努力することの大切さを学びました。

部活動でも多くのことを学びました。僕は陸上部で部長を務めました。陸上部で仲間と協力することの大切さを学びました。仲間とお互い声を掛け合い、良い雰囲気の中で部活に取り組みました。陸上は個人種目ですが、チームで励まし合うことで一人では難しいことも乗り越えることができます。仲間の存在があったからこそきついことも頑張れました。

陸上を通して学んだことをこれからも大切にしたいです。

「普通」って？

三年 宵田 紗良

「普通」この言葉が私を悩ませる。

「とらわれない」考え方が主流となつている時代。確かに、性格とか立場とか、そんな考え方は必要ない。誰でも認められるべきだし、全員が違う人間だから、そもそも区別する必要すらないと思う。しかし、そんな考え方が主流となつている今でも、差別やいじりという名のいじめなどが完全になくなることはない。それは「普通」という言葉から「多様性」や「個性」といった考え方が作られてしまったからではないのか、とふと考えてしまう。「普通」ってなんだろう。

私は授業や意見を発表する時、論拠を書くのが苦手だ。論拠は、主張と根拠を繋げるもので、よく「根拠と論拠をもって意見をいみましょう。」と言われる。主張が事実の場合は、根拠と論拠が簡単に言えることが多い。しかし、主張が自分の考えであった場合、論拠は「普通は○○で○○だからだ。」といったような形になることが

ほとんどだ。例えば「私はめんどくさがりだと思う。理由は、しないといけないことも後回しにしようからだ。普通の人ならー。」「普通」ってなんだろう。

私は新しいことに挑戦するのが怖くないタイプで、基本は怖気付いたりしない。この部分だけは誰にも負けたくないし、自分の長所だと自信をもつていえる。でも、ある友達は前に出るのはあまり好きではなく、なるべく自分からは前に出ないようにしているらしい。その友達が大人数の前で発表する機会があった。そこで私は、「あまり考えすぎずに、楽に話せば大丈夫。」と言った。応援の気持ちで言った。すると、言われる。

「普通の人は、大人数の前で喋るの、緊張するんだよ。」と。「普通」ってなんだろう。

普通って誰が決めたものなんだろう。普通の基準ってなんだろう。どんなことをするのが普通で、どんなことをしてしまつたら、普通じゃなくなってしまうのか。全員が違う見た目で、違う考え方で、違う生き方で。人は誰も同じところなんてないはずなのに、「普通」という言葉があるせいで「多様性」や「個性」という考えが作

られてしまった。これらの言葉のせいで、差があるように、区別されているように、してしまっているように感じてしまう。そして、棘いっばいの言葉がどこでも飛び交ってしまふ。

人は誰も同じところなんてない。しかし、似ているところはあつた。世界中の人達、全員が似ていると言えるところは「傷つく」というところだろう。どれだけポジティブな人でも傷ついていると知ってほしい。「この人だから言っている」という考えをなくしてほしい。自分が気にしていることを言われたり、自分的に気にしていなかったことをバカにされたりすることでコンプレックスとなつてしまつたり。そのような行動が自分はどう感じるのか。相手はどれだけ傷ついているのか。これらを考えて、自分の考えを押し付けてはいけないという理由が分かるはずだ。

つまり、私が本当に目指す世界は、みんながみんなを思い合うことで、誰かが重荷を背負うことなく、ひとりひとりが認められる世界だ。誰かのことを思つたり、誰かのためを考えると、もちろん少しは我慢が必要になつてくるだろう。しかし、誰かがその人のことを思つて行

動しても、その人は優しさに気づかないまま、優しさを返さないまま。

そうすると、優しい人だけが辛い思いをする。そんな世界は間違つていて、生きにくい。だから、少しでいいから意識してみしてほしい。相手を思い、ひとりの人間としてみんなのことを認めるといふことを。

そうして、たくさん笑顔が増えることを、私は一生願っている。